



# カンボジア～タイ訪問記【カンボジア編】 カイトン倉庫と海外への寄付活動

カイトン倉庫サービスと、それに紐づく CSR 活動の一環として  
カンボジアの小学校へ古着と文房具の寄付活動に行ってきました！

写真/レポート = 金光 広明



Mar.2025 vol.181

The OpenTalkS

今回カンボジアの子供たちに寄付したのは、江戸川区が主体となって集めた古着と日本のとある紙製品メーカーから寄付された学習用のノート約 3000 冊



一年を通じて日中は 30℃を超えるカンボジアですが夜の冷え込み対策として厚手の冬服も重宝される



交通の便が非常に悪く、自転車が一番喜ばれるとのこと近所の農家に 500 リエル（約 18 円）支払い学校まで農耕機に乗せてもらって通学する子供も多い



今回の寄付品を日本で廃棄すると 200 万円程度の廃棄費用がかかるとのこと海外へ寄付することで、資源の無駄も廃棄費用も削減できる



江戸川区内の 9 つの小学校から集められた子供用衣類が寄付された

カンボジアの現代史は紛争とポル・ポトによる悲惨な政治体制の歴史と言えるのではないだろうか。隣国であるベトナムで起こったベトナム戦争に引きずられる形で、カンボジアでも国王率いる親共産勢力と軍人主導の親米勢力に分かれた内戦が始まりました。

ベトナム戦争の終結でアメリカがベトナムから撤退すると、カンボジアでも親共産勢力が親米軍事政権を倒し、民主カンボジアが成立しました。内戦に勝利した国王が再び国を治めると思いきや、国王を支援していたポル・ポト率いるクメール・ルージュが国を乗っ取り、歴史上悪名高いポル・ポト

## カンボジア現代史

時代とへと突入していきます。ポル・ポトは学校、病院、工場を閉鎖し、銀行業務どころか貨幣そのものを廃止する極端な政策を押し進め、知識層をメインに 100 万人ともいわれる自国民の大量虐殺で国を完全に破壊しました。（映画『キリングフィールド』参照）

カンボジアに平和が訪れたのはポル・ポトが死去した 1998 年とごく最近のこと。その後世界各国からの支援で復興が進められていますが、破壊しつくされた国家機構の再建への道は遠く、自国通貨も存在するが、米ドルが主に使用されており、民法が施行されたのもほんの 14 年前のことである。

## ■海を渡って 4400 キロ

OTS では、ファッション業界に付いて回るデッドストックの問題や、それに伴う大量廃棄（ファッショロス）の問題を少しでも解決すべく【カイトン倉庫サービス】を展開してきました。

不動産在庫や不要になった什器等をお預かりし、お客様のご要望に沿って新たな販売先をご紹介したり、寄付という形で東南アジアへ送るお手伝いをしています。

今月はカイトン倉庫サービスの協力会社であるエコランド様と、SDGs 活動で協力関係にある江戸川区様と共に取り組んだ古着のカンボジアへの寄付活動特集いたします。

今回寄付した古着は OTS が直接回収したものではありませんが、大量に集まった古着を、OTS でサイズ別に仕分けするという形でお手伝いさせていただきました。

OTS からカンボジアに足を運んだのは、カイトン倉庫サービスの担当者である営業の櫻庭氏と、撮影記録係として私、金光の 2 名。成田からバンコクまで 6 時間、そこからプノンペンまで 1 時間、そしてプノンペンからバスで 4 時間という遙かな道を行き、今回の寄付先であるポーサット州にあるセレイクンテアー小学校とチョンロック小学校に行ってみました。

カンボジアのさらに片田舎でもあるこの地域は、かろうじて電気は通っているものの、道路も赤土のまま舗装されておらず、生活インフラも十分に整備されていませんでした。また、この付近のエリアは経済的に苦しい生活をしている家庭が多く数少ない私服や制服を一年中着ている子供が多いとのこと。勉強に使うノートなどの文房具を購入することも難しく、もっぱら今回のような支援に頼っているという状況だそうです。

学校の校舎自体も日本からの寄付により建てられたものということで、カンボジアという国がまだまだ発展の途上にあるのだなと改めて感じました。

服やノートを渡すと、皆うれしそうな笑顔で、お互いに服を見せあったり、真っ白なノートを何度も眺めている姿が印象的でした。

このような活動がなければ、古着もノートもそのまま日本で廃棄処分されてしまいました。必要としている人に必要なものが届けられる仕組み、それこそまさにカイトン倉庫の目指すところ。今回はカイトン倉庫の中でも寄付活動を取り上げましたが、次回はタイ編として、海外でのリユース販売について特集したいと思います。

今回のカンボジア訪問で一番感じたことは、子供たちが皆一様に笑顔で楽しそうにしている姿でした。物質的には貧しいといえる状況でしたが、そんなこととは関わりなく、楽しさや幸せは享受できるのだということ、子供たちから学ぶことができた非常に貴重な体験でした。